源氏物語

玉鬘

紫式部

与謝野晶子訳

火のくににおひいでたれば言ふことの
皆恥づかしく頬(ほ)の染まるかな（晶子）

年月はどんなにたっても、源氏は死んだ夕顔のことを少しも忘れずにいた。個性の違った恋人を幾人も得た人生の行路に、その人がいたならばと遺憾に思われることが多かった。右近は何でもない平凡な女であるが、源氏は夕顔の形見と思って庇護するところがあったから、今日では古い女房の一人になって重んぜられもしていた。須磨(すま)へ源氏の行く時に夫人のほうへ女房

を皆移してしまったから、今では紫夫人の侍女になっているのである。善良なおとなしい女房と夫人も認めて愛していたが、右近の心の中では、夕顔夫人が生きていたなら、明石(あかし)夫人が愛されているほどには源氏から思われておいでになるであろう、たいした恋でもなかった女性たちさえ、余さず将来の保証をつけておいでになるような情け深い源氏であるから、紫夫人などの列にははいらないでも、六条院へのわたましの夫人の中にはおいでになるはずであるといつも悲しんでいた。西の京へ別居させてあった姫君がどうなったかも右近は知らずにいた。夕顔の死が告げてやりにくい心

弱さと、今になって相手の自分であったことは知らせないようにと源氏から言われたことでの遠慮とが、右近のほうから尋ね出すことをさせなかった。そのうちに、乳母（めのと）の良人（おっと）が九州の少弐（しょうに）に任ぜられたので、一家は九州へ下った。姫君の四つになる年のことである。乳母たちは母君の行くえを知ろうといろいろの神仏に願を立て、夜昼泣いて恋しがっていたが何のかいもなかった。しかたがない、姫君だけでも夫人の形見に育てていたい、卑しい自分らといっしょに遠国へおつれすることを悲しんでいると父君のほうへほのめかしたいとも思ったが、よいつてはなかった。その上母君の

所在を自分らが知らずにいては、問われた場合に返辞（へんじ）のしようもない。よく馴染（なじ）んでおいでにならない姫君を、父君へ渡して立って行くのも、自分らの気がかり千万なことであろうし、話をお聞きになった以上は、いっしょにつれて行ってもよいと父君が許されるはずがないなどと言い出す者もあって、美しくて、すでにもう高貴な相の備わっている姫君を、普通の旅役人の船に乗せて立って行く時、その人々は非常に悲しがった。幼い姫君も母君を忘れずに、

「お母様の所へ行くの」

と時々尋ねることが人々の心をより切なくした。涙

の絶え間もないほど夕顔夫人を恋しがって娘たちの泣くのを、

「船の旅は縁起を祝って行かなければならないのだから」

とも親たちは小言（こごと）を言った。美しい名所名所を見物する時、

「若々しいお気持ちの方で、お喜びになるでしょうから、こんな景色（けしき）をお目にかけたい。けれども奥様がおいでになったら私たちは旅に出てないわけですね」

こんなことを言って、京ばかりの思われるこの人たちの目には帰って行く波もうらやましかった。心細く

なっている時に、船夫（かこ）たちは荒々しい声で「悲しいものだ、遠くへ来てしまった」という意味の唄（うた）を唄う声が聞こえてきて、姉妹（きょうだい）は向かい合って泣いた。

船人もたれを恋ふるや大島のうら悲しくも声の聞こゆる

来（こ）し方も行方（ゆくへ）も知らぬ沖に出（い）でてあはれ何処（いづこ）に君を恋ふらん

海の景色を見てはこんな歌も作っていた。金（かね）の岬（みさき）を過ぎても「千早（ちはや）振る金の御崎（みさき）を過ぐれどもわれは忘

れずしがのすめ神」という歌のように夕顔夫人を忘れることができずに娘たちは恋しがった。少弐一家は姫君をかしずき立てることだけを幸福に思って任地で暮らしていた。夢などにたまさか夕顔の君を見ることもあった。同じような女が横に立っているような夢で、その夢を見たあとではいつもその人が病気のようになることから、もう死んでおしまいになったのであろうと、悲しいが思うようになった。

少弐は任期が満ちた時に出京しようと思ったが、出京して失職しているより、地方にこのままいるほうが生活の楽な点があって、思いきって上京することもよ

うしなかった。その間に当人は重い病気になった。少弐は死ぬまぎわにも、もう十歳(とお)ぐらいになっていて、非常に美しい姫君を見て、

「私までもお見捨てすることになれば、どんなに御苦労をなされることだろう、卑しい田舎(いなか)でお育ちになっていることもったいないことと思っておりましたが、そのうち京へお供して参って、御肉身のかたがたへお知らせ申し、その先はあなた様の運命に任せるといたしましても、京は広い所ですから、よいこともきっとあって、安心がさせていただけると思いまして、その実行を早く早くとあせるように思っておりましたが、

希望の実現どころか、私はもうここで死ぬことになりました」

と悲痛なことを言っていた。三人の男の子に、

「おまえたちは何よりせねばならぬことを、姫君を京へお供することと思え。私のための仏事などはするに及ばん」

と遺言をした。父君のだれであるかは自身の家の者にも言わずに、ただ大切にする訳のある孫であると言ってあって、大事にかしずいているうちに、こんなふうでにわかに死んだのであったから、家族は心細がって京への出立を急ぐのであるが、この国には故人

の少弐に反感を持っていた人が多かったから、そんな際に報復を受けることが恐ろしくて、今しばらく今しばらくとはばかって暮らしている間にも、年月がどんどんたってしまった。妙齢になった姫君の容貌（ようぼう）は母の夕顔よりも美しかった。父親のほうの筋によるのか、気高（けだか）い美がこの人には備わっていた、性質も貴女（きじょ）らしくおおようであった。故人の少弐の家に美しい娘のいる噂（うわさ）を聞いて、好色な地方人などが幾人（いくたり）も結婚を申し込んだり、手紙を送って来たりする。失敬なことであるとも、とんでもないことであるとも思って、だれ一人これに好意を持ってやる者はなかった。

「容貌はまず無難でも、不具なところが身体（からだ）にある孫ですから、結婚はさせずに尼にして自分の生きている間は手もとへ置く」
乳母（めのと）はこんなことを宣伝的に言っているのである。
「少弐の孫は片輪（かたわ）だそうだ、惜しいものだ、かわいそうに」
と人が言うのを聞くと、乳母はまた済まない気がして、
「どんなにしても京へおつれしてお父様の殿様にお知らせしよう、まだごく小さい時にも非常におかわいがりになっていたのだから、今になっても決してそま

つにはあそばすまい」

と乳母は興奮する。それの実現されるように神や仏に願を立てていた。娘たちも息子(むすこ)たちも土地の者と縁組みをして土着せねばならぬように傾いていく。心の中では忘れないが京はいよいよ遠い所になっていった。大人(おとな)になった姫君は、自身の運命を悲しんで一年の三度の長精進などもしていた。二十(はたち)ぐらいになるとすべての美が完成されて、まばゆいほどの人になった。この少弐(しょうに)一家のいる所は肥前の国なのである。その辺での豪族などは、少弐の孫の噂(うわさ)を聞いて、今でも絶えず結婚を申し込んでくる、うるさいほどに。

大夫(たゆう)の監(げん)と言って肥後に聞こえた豪族があった。その国ではずいぶん勢いのある男で、強大な武力を持っているのである。そんな田舎武士(いなかざむらい)の心にも、好色的な風流気があって、美人を多く妻妾(さいしょう)として集めたい望みを持っているのである。少弐家の姫君のことを大夫の監は聞きつけて、

「どんな不具なところがあっても、自分はその点を我慢することにして妻にしたい」

と懇切に求婚をしてきた。少弐の人たちは恐ろしく思った。

「どんないい縁談にも彼女は耳をかさないで尼になろ

うとしています」

と中に立った人から断わらせた。それを聞くと監は不安がって、自身で肥前へ出て来た。少弐家の息子たちを監は旅宿へ呼んで姫君との縁組みに助力を求めるのであった。

「成功すれば、両家は力になり合って、あなたがたに武力の後援を惜しむものですか」

などと言ってくれる監(げん)に二人の息子だけは好意を持ちだした。

「私たちも初めは不似合いな求婚者だ、お気の毒だと姫君のことを思ってましたが、考えてみると、自分た

ちの後ろ立てにするのには最も都合のいい有力な男ですから、この人に敵対をされては肥前あたりで何をすることも不可能だということがわかってきました。貴族の姫君だと言っても、父君が打っちゃってお置きになるし、世間からも認められていないではしかたがありません。こんなに熱心になっている監と結婚のできるのはかえって幸福だと思いますよ。この宿命のあるために九州などへ姫君がおいでになることにもなったのでしょう。逃げ隠れをなすっても何になるものですか。負けてなんかいませんからね、監は。常識で考えられる以上の無茶なことでも監はしますよ」

と兄弟は家族をおどすのである。長兄の豊後介（ぶんごのすけ）だけは監の味方でなかった。

「もったいないことだ。少弐の御遺言があるのだから、自分はどうしてもこの際姫君を京へお供しましょう」

と母や妹に言う。女たちも皆泣いて心配していた。母君がどうおなりになったか知れないようなことになって、せめて姫君を人並みな幸福な方にしないではと、自分らは念じているのに、田舎武士（いなかざむらい）などに嫁（とつ）がせてしまいすることなどは堪えうることでないと思っていることも知らずに、自身の力を過信している監は、手紙を書いて送ってきたりするのである。字なども

ちょっときれいで、唐紙（とうし）に香の薫（かお）りの染（し）ませたのに書いて来る手紙も、文章も物になってはいなかった。また自身も親しくなった少弐家の次男とつれ立って訪（たず）ねて来た。年は三十くらいの男で、背が高くて、ものものしく肥っている。きたなくは思われないが、いろいろ先入主になっていることがあって、見た感じがうとましい。荒々しい様子は見ただけでも恐ろしい気がした。血色がよくて快活ではあるが、涸（か）れ声で語り散らす。求婚者は夜に訪問するものになっているが、これは風変わりな春の夕方のことであった。秋ではないが怪しい気持ち（何時（いつ）とても恋しからずはあらねども秋

の夕べは怪しかりけり）になったのかもしれない。機嫌（きげん）をそこねまいとして未亡人のおとどが出て応接した。

「お亡（かく）れになった少弐は人情味のたっぷりとあるりっぱなお役人でしたからぜひ御懇親を願いたいと思いながら、こちらの尊敬心をお見せできなかったうちにお気の毒に死んでおしまいになったから、そのかわりに御遺族へ敬意を表しようと思って、奮発して、一所懸命になって、しいて参りました。こちらにおいでになる姫君が御身分のいいことを私は聞いていて、尊敬申してますが、妻になっていただきたいのだ。我輩（わがはい）は一

家の御主人と思って頭の上へ載せんばかりにしてですね、大事にいたしますよ。あなたがこの縁組みにあまり御賛成にならないというのは、私がこれまで幾人(いくたり)ものつまらない女と関係してきたことで、いやがられているのではありませんか。たとえそんな女どもが私についているとしても、そいつらに姫君といっしょの扱いなどをするものですかい。我輩は姫君を后(きさき)の位から落とすつもりはない」

などと勝手なことを監(げん)は言い続けた。

「いえ、不賛成などと、そんなことはありません。非常に結構なお話だと私は思っているのですがね。何と

いう不運なのでしょう、あの人は並み並みに一人前の女に成り切っていないところがありましてね、自分は結婚のできない身体(からだ)だとあきらめていますが、かわいそうでも、私どもの力ではどうにもならないのでございます」

と、おとどは言った。

「決して遠慮をなさるには及びませんよ。どんな盲目(めくら)でも、いざりでも私は護(まも)っていってあげます。我輩(わがはい)が人並みの身体に直してあげますよ。肥後一国の神仏は我輩の意志どおりに何事も加勢してくれますからね」

などと監(げん)は誇っていた。結婚の日どりも何日(いつ)ごろと

いうようなことを監が言うと、おとどのほうでは、今月は春の季の終わりで結婚によろしくないというような田舎めいた口実で断わる。縁側から下(お)りて行く時になって、監は歌を作って見せたくなった。やや長く考えてから言い出す。

「君にもし心たがはば松浦(まつら)なるかがみの神をかけて
誓はん

この和歌は我輩の偽らない感情がうまく表現できたと思います」

と監は笑顔(えがお)を見せた。おとどはすべてのことが調子はずれな田舎武士に、返歌などをする気にはなれないのであったが、娘たちに歌を詠(よ)めと言うと、

「私など、お母さんだってそうでしょう。自失している体(てい)よ」

　こう言って聞かない。おとどは興味のない返歌をやっと出まかせふうに言った。

　年を経て祈る心のたがひなばかがみの神をつらし
　　とや見ん

先刻からの気味悪さにおとどは慄（ふる）え声になっていた。

「お待ちなさい。そのお返事の内容だが」

監（げん）がのっそりと寄って来て、腑（ふ）に落ちぬという顔をするのを見て、おとどは真青（まっさお）になってしまった。娘たちはあんなに言っていたものの、こうなっては気強く笑って出て行った。

「それはね、お嬢様が世間並みの方でないことから、母がこの御縁の成立した時に、恨めしくお思いにならないかということを、もうぼけております母が神様のお名などを入れて、変に詠（よ）んだだけの歌ですよ」

とこじつけて聞かせた。正解したところで求婚者へ

のお愛想歌なのであるが、
「ああもっとも、もっとも」
とうなずいて、監は、
「技巧が達者なものですね。我輩は田舎者ではあるが賤民じゃないのです。京の人でもたいしたものでないことを我輩は知っている。軽蔑してはいけませんよ」
と言ったが、もう一首歌を作ろうとして、できなかったのかそのまま帰って行った。次郎がすっかりあちらがたになっているのを家族は憎みながらも、豊後介の助けを求めることが急であった。どうして姫君にお尽くしすればよいか、相談相手はなし、親身の兄弟まで

が監に反対すると言って、異端者扱いにして自分と絶交する始末である。監の敵になってはこの地方で何一つ仕事はできないだろう、手出しをしてかえって自分から不幸を招きはしまいかと豊後介は煩悶（はんもん）をしたのであるが、姫君が口では何事も言わずにこのことで悲しんでいる様子を見ると、気の毒で、そうなれば死のうと決心している様子が道理に思われ、豊後介は苦しい策をして姫君の上京を助けることにした。妹たちも馴染（なじ）んだ良人（おっと）を捨てて姫君について行くことになった。あてきと言って、夕顔夫人の使っていた童女は兵部（ひょうぶ）の君という女房になっていて、この女たちが付き添って、

夜に家を出て船に乗った。大夫の監はいったん肥後へ帰って四月二十日ごろに吉日を選んで新婦を迎えに来ようとしているうちに、こうして肥前を脱出するのである。姉は子供もおおぜいになっていて同行ができないのである。行く人、残る人が名残を惜しんで、また見る機会のないことを悲しむのであったが、行く人にとっては長い年月をここで送ったのではあっても、見捨てがたいほど心の残るものは何もこの土地になかった。ただ松浦の宮の前の海岸の風光と姉娘と別れることだけがだれにもつらかった。顧みもされた。

浮島（うきしま）を漕（こ）ぎ離れても行く方やいづくとまりと知らずもあるかな

行くさきも見えぬ波路に船出して風に任する身こそ浮きたれ

初めのは兵部の作で、あとのは姫君の歌である。心細くて姫君は船でうつ伏しになっていた。こうして逃げ出したことが肥後に知れたなら、負けぎらいな監は追って来るであろうと思われるのが恐ろしくて、この船は早船といって、普通以上の速力が出るように仕かけてある船であったから、ちょうど追い風も得て危う

いほどにも早く京をさして走った。響（ひびき）の灘（なだ）も無事に過ぎた。海上生活二、三日ののちである。

「海賊の船なんだろうか、小さい船が飛ぶように走って来る」

などと言う者がある。惨酷（ざんこく）な海賊よりも少弐（しょうに）の遺族は大夫（たゆう）の監（げん）をもっと恐れていて、その追っ手ではないかと胸を冷やした。

　憂（う）きことに胸のみ騒ぐひびきには響の灘も名のみ
　　なりけり

と姫君は口ずさんでいた。川尻（かわじり）が近づいたと聞いた時に船中の人ははじめてほっとした。例の船子（かこ）は「唐泊（からどまり）より川尻押すほどは」と唄（うた）っていた。荒々しい彼らの声も身に沁（し）んだ。豊後介（ぶんごのすけ）はしみじみする声で、愛する妻子も忘れて来たと歌われているとき、その歌のとおりに自分も皆捨てて来た、どうなるであろう、力になるような郎党は皆自分がつれて来てしまった。自分に対する憎悪（ぞうお）の念から大夫の監は彼らに復讐をしないであろうか、その点を考えないで幼稚な考えで、脱出して来たと、こんなことが思われて、気の弱くなった豊後介は泣いた。「胡地妻子虚棄損（こちのさいしをむなしくすつ）」とこう兄の歌っ

ている声を聞いて兵部も悲しんだ。自分のしていることは何事であろう、愛してくれる男ににわかにそむいて出て来たことをどう思っているであろうと、こんなことが思われたのである。京へはいっても自分らは帰って行く邸(やしき)などはない、知人の所といっても、たよって行ってよいほど頼もしい家もない、ただ一人の姫君のために生活の根拠のできていた土地を離れて、空想の世界へ踏み入ろうとする者であると豊後介は考えさせられた。姫君をもどうするつもりでいるのであろうと自身であきれながらも今さらしかたがなくてそのまま一行は京へはいった。九条に昔知っていた人の

残っていたのを捜し出して、九州の人たちは足どまりにした。ここは京の中ではあるがはかばかしい人の住んでいる所でもない町である。外で働く女や商人の多い町の中で、悲しい心を抱いて暮らしていたが、秋になるといっそう物事が身に沁んで思われて過去からも、未来からも暗い影ばかりが投げられる気がした。信頼されている豊後介も、京では水鳥が陸へ上がったようなもので、職を求める手蔓も知らないのであった。今さら肥前へ帰るのも恥ずかしくてできないことであった。思慮の足りなかったことを豊後介は後悔するばかりであるが、つれて来た郎党も何かの口実を作って一

人去り二人去り、九州へ逃げて帰る者ばかりであった。無力な失職者になっている長男に同情したようなことを母のおとどが言うと、

「私などのことは何でもありません。姫君を護(まも)っていることができれば、自分の郎党などは一人もなくなってもいいのですよ。どんなに自分らが強力な豪族になったっても、姫君をああした野蛮な連中に取られてしまえば、精神的に死んでしまったのも同然ですよ」

と豊後介は慰めるのであった。

「神仏のお力にすがればきっと望みの所へ導いてくださるでしょうから、お詣(まい)りをなさるがいいと思います。

ここから近い八幡(やわた)の宮は九州の松浦、箱崎(はこざき)と同じ神様なのですから、あちらをお立ちになる時、お立てになった願もありますから、神の庇護で無事に帰京しましたというお礼参りをなさいませ」

　と豊後介は言って、姫君に八幡詣(やわたまい)りをさせた。八幡のことにくわしい人に聞いておいて、御師(おし)という者の中に、昔親の少弐が知っていた僧の残っているのを呼び寄せて、案内をさせたのである。

「このつぎには、仏様の中で長谷(はせ)の観音様は霊験のいちじるしいものがあると支那(しな)にまで聞こえているそうですから、お参りになれば、遠国にいて長く苦労をな

すった姫君をきっとお憐(あわれ)みになってよいことがあるでしょう」

また豊後介は姫君に長谷詣(はせもう)でを勧めて実行させた。船や車を用いずに徒歩で行くことにさせたのである。かって経験しない長い路(みち)を歩くことは姫君に苦しかったが、人が勧めるとおりにして、つらさを忍んで夢中で歩いて行った。自分は前生にどんな重い罪障があってこの苦しみに堪えねばならないのであろう、母君はもう死んでおいでになるにしても、自分を愛してくださるならその国へ自分をつれて行ってほしい。しかしまだ生きておいでになるのならお顔の見られるように

していただきたいと姫君は観音を念じていた。姫君は母の顔を覚えていなかった。ただ漠然(ばくぜん)と親というものの面影を今日(きょう)まで心に作って来ているだけであったが、こうした苦難に身を置いては、いっそう親というものの恋しさが切実に感ぜられるのであった。ようやく椿市(つばいち)という所へ、京を出て四日めの昼前に、生きている気もしないで着いた。姫君は歩行らしい歩行もできずに、しかもいろいろな方法で足を運ばせて来たが、もう足の裏が腫(は)れて動かせない状態になって椿市で休息をしたのである。頼みにされている豊後介と、弓矢を持った郎党が二人、そのほかは僕(しもべ)と子供侍が三、四

人、姫君の付き添いの女房は全部で三人、これは髪の上から上着を着た壺装束をしていた。それから下女が二人、これが一行で、派手な長谷詣りの一行ではなかった。寺へ燈明料を納めたりすることをここで頼んだりしているうちに日暮れ時になった。この家の主人である僧が向こうで言っている。

「私には今夜泊めようと思っているお客があったのだのに、だれを勝手に泊めてしまったのだ、物知らずの女どもめ、相談なしに何をしたのだ」

怒っているのである。九州の一行は残念な気持ちでこれを聞いていたが、僧の言ったとおりに参詣者の一

団が町へはいって来た。これも徒歩で来たものらしい。主人らしいのは二人の女で召使の男女の数は多かった。馬も四、五匹引かせている。目だたぬようにしているが、きれいな顔をした侍などもついていた。主人の僧は先客があってもその上にどうかしてこの連中を泊めようとして、道に出て頭を掻（か）きながら、ひよこひよこと追従（ついしょう）をしていた。かわいそうな気はしたが、また宿を変えるのも見苦しいことであるし、面倒（めんどう）でもあったから、ある人々は奥のほうへはいり、残りの人々はまた見えない部屋（へや）のほうへやったりなどして、姫君と女房たちとだけはもとの部屋の片すみのほうへ寄って、

幕のようなもので座敷の仕切りをして済ませていた。あとの客も無作法な人たちではなかった。遠慮深く静かで、双方ともつつましい相い客になっていた。このあとから来た女というのは、姫君を片時も忘れずに恋しがっている右近であった。年月がたつにしたがって、いつまでも続けている女房勤めも気がさすように思われて、煩悶（はんもん）のある心の慰めに、この寺へたびたび詣（まい）っているのである。長い間の経験で徒歩の旅を大儀とも何とも思っているのではなかったが、さすがに足はくたびれて横になっていた。こちらの豊後介は幕の所へ来て、食事なのであろう、自身で折敷（おしき）を持って言って

いた。

「これを姫君に差し上げてください。膳や食器なども寄せ集めのもので、まったく失礼なのです」

右近はこれを聞いていて、隣にいる人は自分らの階級の人ではないらしいと思った。幕の所へ寄ってのぞいて見たが、その男の顔に見覚えのある気がした。だれであるかはまだわからない。豊後介のごく若い時を知っている右近は、肥えて、そうして色も黒くなっている人を今見て、直ぐには思い出せないのである。

「三条、お召しですよ」

と呼ばれて出て来る女を見ると、それも昔見た人で

あった。昔の夕顔夫人に、下の女房ではあったが、長く使われていて、あの五条の隠れ家にまでも来ていた女であることがわかった右近は、夢のような気がした。主人である人の顔を見たく思っても、それはのぞいて見られるようなふうにはしていなかった。思案の末に右近は三条に聞いてみよう、兵藤太（ひょうとうだ）と昔言われた人もこの男であろう、姫君がここにおいでになるのであろうかと思うと、気が急いで、そしてまた不安でならないのであった。幕の所から三条を呼ばせたが、熱心に食事をしている女はすぐに出て来ないのを右近は憎くさえ思ったが、それは勝手すぎた話である。やっと出

て来た。
「どうもわかりません。九州に二十年も行っておりました卑しい私どもを知っておいでになるとおっしゃる京のお方様、お人違いではありませんか」
と言う。田舎（いなか）風に真赤（まっか）な搔練（かいねり）を下に着て、これも身体（からだ）は太くなっていた。それを見ても自身の年が思われて、右近は恥ずかしかった。
「もっと近くへ寄って私を見てごらん。私の顔に見覚えがありますか」
と言って、右近は顔をそのほうへ向けた。三条は手を打って言った。

「まああなたでいらっしゃいましたね。うれしいって、うれしいって、こんなこと。まああなたはどちらからお参りになりました。奥様はいらっしゃいますか」

三条は大声をあげて泣き出した。昔は若い三条であったことを思い出すと、このなりふりにかまわぬ女になっていることが右近の心を物哀れにした。

「おとどさんはいらっしゃいますか。姫君はどうおなりになりました。あてきと言った人は」

と、右近はたたみかけて聞いた。夫人のことは失望をさせるのがつらくてまだ口に出せないのである。

「皆、いらっしゃいます。姫君も大人（おとな）になっておいで

になります。何よりおとどさんにこの話を」

と、言って三条は向こうへ行った。九州から来た人たちの驚いたことは言うまでもない。

「夢のような気がします。どれほど恨んだかしれない方にお目にかかることになりました」

おとどはこう言って幕の所へ来た。もうあちらからも、こちらからも隔てにしてあった屏風(びょうぶ)などは取り払ってしまった。右近もおとども最初はものが言えずに泣き合った。やっとおとどが口を開いて、

「奥様はどうおなりになりました。長い年月の間夢にでもいらっしゃる所を見たいと大願を立てましたがね、

私たちは遠い田舎の人になっていたのですからね、何の御様子も知ることができません。悲しんで、悲しんで、長生きすることが恨めしくてならなかったのですが、奥様が捨ててお行きになった姫君のおかわいいお顔を拝見しては、このまま死んでは後世の障りになると思いましてね、今でもお護りしています」

おとどの話し続ける心持ちを思っては、昔あの時に気おくれがして知らせられなかったよりも、幾倍かのつらさを味わいながらも、絶体絶命のようになって、右近は、

「お話ししてもかいのないことでございますよ。奥様

はもう早くお亡(かく)れになったのですよ」
と言った。三条も混ぜて三人はそれから咽(む)せ返って泣いていた。

日が暮れたと騒ぎ出し、お籠(こも)りをする人々の燈明が上げられたと宿の者が言って、寺へ出かけることを早くと急がせに来た。そのために双方ともまだ飽き足らぬ気持ちで別れねばならなかった。

「ごいっしょにお詣(まい)りをしましょうか」

とも言ったが、双方とも供の者の不思議に思うことを避けて、おとどのほうではまだ豊後介にも事実を話す間がないままで同時に宿坊を出た。右近は人知れず

九州の一行の中の姫君の姿を目に探っていた。そのうちに美しい後ろ姿をした一人の、非常に疲労した様子で、夏の初めの薄絹の単衣（ひとえ）のような物を上から着て、隠された髪の透き影のみごとそうな人を右近は見つけた。お気の毒であるとも、悲しいことであるとも思ってながめたのである。少し歩き馴（な）れた人は皆らくらくと上の御堂（みどう）へ着いたが、九州の一行は姫君を介抱（かいほう）しながら坂を上るので、初夜の勤めの始まるころにようやく御堂へ着いた。御堂の中は非常に混雑していた。右近が取らせてあったお籠（こも）り部屋（べや）は右側の仏前に近い所であった。九州の人の頼んでおいた僧は無勢力なのか

西のほうの間で、仏前に遠かった。

「やはりこちらへおいでなさいませ」

と言って、右近が召使をよこしたので、男たちだけをそのほうに残して、おとどは右近との邂逅（かいこう）を簡単に豊後介へ語ってから、右近の部屋のほうへ姫君を移した。

「私などつまらない女ですが、ただ今の太政大臣様にお仕えしておりますのでね、こんな所に出かけていましても不都合はだれもしないであろうと安心していられるのですよ。地方の人らしく見ますと、生意気にお寺の人などは軽蔑（けいべつ）した扱いをしますから、姫君にもっ

たいなくて」

右近はくわしい話もしたいのであるが、仏前の経声の大きいのに妨げられて、やむをえず仏を拝んでだけいた。

この方をお捜しくださいませ、お逢(あ)わせくださいませとお願いしておりましたことをおかなえくださいましたから、今度は源氏の大臣(おとど)がこの方を子にしてお世話をなさりたいと熱心に思召(おぼしめ)すことが実現されますようにお計らいくださいませ、そうしてこの方が幸福におなりになりますように。

と祈っているのであった。国々の参詣(さんけい)者が多かった。

大和守（やまとのかみ）の妻も来た。その派手（はで）な参詣ぶりをうらやんで、三条は仏に祈っていた。

「大慈大悲の観音様、ほかのお願いはいっさいいたしません。姫君を大弐（だいに）の奥様でなければ、この大和の長官の夫人にしていただきたいと思います。それが事実になりまして、私どもにも幸福が分けていただけました時に厚くお礼をいたします」

額に手を当てて念じているのである。右近はつまらぬことを言うとにがにがしく思った。

「あなたはとんでもないほど田舎者になりましたね。中将様は昔だってどうだったでしょう、まして今では

天下の政治をお預かりになる大臣（おとど）ですよ。そうしたお盛んなお家の方で姫君だけを地方官の奥さんという二段も三段も低いものにしてそれでいいのですか」

と言うと、

「まあお待ちなさいよあなた。大臣様だって何だってだめですよ。大弐のお館（やかた）の奥様が清水（きよみず）の観世音寺へお参りになった時の御様子をご存じですか、帝（みかど）様の行幸（みゆき）があれ以上のものとは思えません。あなたは思い切ったひどいことをお言いになりますね」

こう言って、三条はなお祈りの合掌を解こうとはしなかった。九州の人たちは三日参籠（さんろう）することにしてい

た。右近はそれほど長くいようとは思っていなかったが、この機会（おり）に昔の話も人々としたく思って、寺のほうへ三日間参籠すると言わせるために僧を呼んだ。雑用をする僧は願文（がんもん）のことなどもよく心得ていて、すばやくいろいろのことを済ませていく。

「いつもの藤原瑠璃君（ふじわらのるりぎみ）という方のためにお経をあげてよくお祈りすると書いてください。その方にね、近ごろお目にかかることができましたからね。その願果たしもさせていただきます」

と右近の命じていることも九州の人々を感動させた。

「それは結構なことでしたね。よくこちらでお祈りし

ているせいでしょう」

などとその僧は言っていた。御堂の騒ぎは夜通し続いていた。

夜が明けたので右近は知った僧の坊へ姫君を伴って行った。静かに話したいと思うからであろう。質素なふうで来ているのを恥ずかしがっている姫君を右近は美しいと思った。

「私は思いがけない大きなお邸（やしき）へお勤めすることになりまして、たくさんな女の方を見ましたが、殿様の奥様の御容貌（ごきりょう）に比べてよいほどの方はないと長い間思っていました。それにお小さいお姫様がまたお美し

いことはもっともなことですが、そのお姫様はまたどんなに大事がられていらっしゃるか、まったく幸福そのもののような方ですがね、こうして御質素なふうをなすっていらっしゃる姫君を、私は拝見して、その奥様や二条院のお姫様に姫君が劣っていらっしゃるように思われませんのでうれしゅうございます。殿様はおっしゃいますのですよ、自分の父君の帝様の時から宮中の女御やお后、それから以下の女性は無数に見ているが、ただ今の帝様のお母様のお后の御美貌と自分の娘の顔とが最もすぐれたもので、美人とはこれを言うのであると思われるって。私は拝見していて、

そのお后様は存じませんけれど、お姫様はまだお小さくて将来は必ずすぐれた美人におなりになるでしょうが、奥様の御美貌に並ぶ人はないと思うのですよ。殿様も奥様のお美しさの価値を十分ご存じでいらっしゃるでしょうが、御自分のお口から最上の美人の数へお入れにはなりにくいのですよ。こんなこともお言いになることがあるのですよ、あなたは私と夫婦になれたりしてもったいなく思いませんかなどと戯談(じょうだん)をね。お二人のそろいもそろったお美しさを拝見しているだけで命も延びる気がするのですよ。あんな方はあるものでもありません、私がそんなに思う六条院の奥様に

どこ一つ姫君は劣っていらっしゃいません。物は限りがあってすぐれた美貌と申しても円光を後ろに負っていらっしゃるわけではありませんけれど、これがほんとうに美しいお顔と申し上げていいのでございましょう」

右近は微笑(ほほえ)んで姫君をながめていた。少弐(しょうに)の未亡人もうれしそうである。

「こんなすぐれたお生まれつきの方を、もう一歩で暗い世界へお沈めしてしまうところでしたよ。惜しくてもったいなくて、家も財産も捨てて頼(たよ)りにしてよい息子(むすこ)にも娘にも別れて、今ではかえって知らぬ他国の

ような心細い気のする京へ帰って来たのですよ。あなた、どうぞいい智慧（ちえ）を出してくださすって、姫君の御運を開いてあげてくださいまし。貴族のお家に仕えておいでになる方は、便宜がたくさんあるでしょう。お父様の大臣が姫君をお認めくださいますように計らってくださいまし」

とおとどは言うのであった。姫君は恥ずかしく思って後ろを向いていた。

「それがね、私はつまらない者ですけれど、殿様がおそばで使っていてくださいますからね、昔のいろいろな話を申し上げる中で、どうなさいましたろうと私が

姫君のことをよく申すものですから、殿様が、ぜひ自分の所へ引き取りたく思う。居所を聞き込んだら知らせるがいいとおっしゃるのですよ」

「源氏の大臣様はどんなにおりっぱな方でも、今のお話のようなよい奥様や、そのほかの奥様も幾人(いくたり)かいらっしゃるのでしょう。それよりもほんとうのお父様の大臣へお知らせする方法を考えてください」

とおとどが言うのを聞いて、右近ははじめて夕顔夫人を愛して、死の床に泣いた人の源氏であったことを話した。

「どうしてもお亡(かく)れになった奥様を忘れられなく思召(おぼしめ)

してね。奥様の形見だと思って姫君のお世話をしたい、自分は子供も少なくて物足りないのだから、その人が捜し出せたなら、自分の子を家へ迎えたように世間へは知らせておこうと、それはずっと以前からそうおっしゃるのですよ。私の幼稚な心弱さから、奥様のお亡くなりになりましたことをあなたがたにお知らせすることができないでおりますうちに、御主人が少弐におなりになったでしょう。それはお名を聞いて知ったのですよ。お暇乞いに殿様の所へおいでになりましたのを、私はちらとお見かけしましたが、何をお尋ねすることもできないじまいになったのですよ。それでもま

だ姫君をあの五条の夕顔の花の咲いた家へお置きになって赴任をなさるのだと思っていました。まあどうでしょう、もう一歩で九州の人になっておしまいになるところでございましたね」

などと人々は終日昔の話をしたり、いっしょに念誦（ねんず）を行なったりしていた。御堂へ参詣する人々を下に見おろすことのできる僧坊であった。前を流れて行くのが初瀬川である。右近は、

「二もとの杉（すぎ）のたちどを尋ねずば布留（ふる）川のべに君を見ましや

ここでうれしい逢瀬（おうせ）が得られたと申すものでございます」

と姫君に言った。

初瀬川はやくのことは知らねども今日（けふ）の逢瀬に身さへ流れぬ

と言って泣いている姫君はきわめて感じのよい女性であった。これだけの美貌（びぼう）が備わっていても、田舎（いなか）風のやぼな様子が添っていたなら、どんなにそれを玉の

瑕（きず）だと惜しまれることであろう、よくもこれほどりっぱな貴女にお育ちになったものであると、右近は少弐未亡人に感謝したい心になった。母の夕顔夫人はただ若々しくおおような柔らかい感じの豊かな女性というにすぎなかった。これは容姿に気高（けだか）さのあるすぐれた姫君と見えるのであった。右近はこれによって九州という所がよい所であるように思われたが、また昔の朋輩（ほうばい）が皆不恰好（ぶかっこう）な女になっているのであったから不思議でならなかった。日が暮れると御堂に行き、翌日はまた坊に帰って念誦（ねんず）に時を過ごした。秋風が渓（たに）の底から吹き上がって来て肌寒（はださむ）さの覚えられる所であったか

ら、物寂しい人たちの心はましてかった。姫君は右近の話から、人並みの運も持たないように悲観をしていた自分も、父の家の繁栄と、低い身分の人を母として生まれた子供たちさえも皆愛されて幸福になっていることがわかった上は、もう救われる時に達したのであるかもしれないという気になった。帰る時は双方でよく宿所を尋ね合って、またわからなくなってはと互いに十分の警戒をしながら別れた。右近の自宅も六条院に近い所であったから、九州の人の宿とも遠くないことを知って、その人たちは力づけられた気がした。

右近は旅からすぐに六条院へ出仕した。姫君の話を

する機会を早く得たいと思う心から急いだのである。門をはいるとすでにすべての空気に特別な豪華な家であることが感ぜられるのが六条院である。来る車、出て行く車が無数に目につく。自分などがこの家の一人の女房として自由に出入りをすることもまばゆい気のすることであると右近に思われた。その晩は主人夫婦の前へは出ずに、部屋へ引きこもって右近はまた物思いをした。翌日は昨日自宅から上がって来た高級の女房が幾人（いくたり）もある中から、特に右近が夫人に呼び出されたのを、右近は誇らしく思った。源氏も夫人の居間にいた。

「どうして長く家へ行っていたのかね。少しこれまでとは違っているのではないか。独身者はこんな所にいる時と違って、自宅では若返ることもできるのだろう。おもしろいことがきっとあったろう」

などと例の困らせる気の戯談（じょうだん）を源氏が言う。

「ちょうど七日お暇（いとま）をいただいていたのでございますが、おもしろいことなどはなかなかないのでございます。山へ参りましてね。お気の毒な方を発見いたしました」

「だれ」

と源氏は尋ねた。突然その話をするのも、これまで

夫人にしていない昔の話から筋を引いていることを、源氏にだけ言えば夫人があとで話をお聞きになって不快がられないかなどと右近は迷っていて、

「またくわしくお話を申し上げます」

と言って、ほかの女房たちも来たのでそのまま言いさしにした。

灯(ひ)などをともさせてくつろいでいる源氏夫婦は美しかった。女王(にょおう)は二十七、八になった。盛りの美があるのである。このわずかな時日のうちにも美が新しく加わったかと右近の目に見えるのであった。姫君を美しいと思って、夫人に劣っていないと見たものの思いな

しか、やはり一段上の美が夫人にはあるようで幸福な人と不運な人とにはこれだけの相違があるものらしいなどと右近は思った。寝室にはいってから、脚(あし)を撫(な)でさせるために源氏は右近を呼んだ。

「若い人はいやな役だと迷惑がるからね。やはり昔馴染(なじみ)の者は気心が双方でわかっていてどんなことでもしてもらえるよ」

と源氏が言っているのを聞いて、若い女房たちは笑っていた。

「そうですよ。どんなことでもさせていただいて私たちは結構なんですけれど、あの御戯談(ごじょうだん)に困るだけね」

などと言っているのであった。

「奥さんも昔馴染どうしがあまり仲よくしては機嫌(きげん)を悪くなさらない。決して寛大な方ではないから危(あぶな)いね」

などと言って源氏は笑っていた。愛嬌(あいきょう)があって常よりもまた美しく思われた。このごろは公職が閑散なほうに変ってしまって、自宅でものんきに女房などにも戯談を言いかけて相手をためすことなどを楽しむ源氏であったから、右近のような古女(ふるおんな)にも戯れてみせるのである。

「発見したって、どんな人かね。えらい修験者(しゅげんじゃ)などと

懇意になってつれて来たのか」

と源氏は言った。

「ひどいことをおっしゃいます。あの薄命な夕顔のゆかりの方を見つけましたのでございます」

「そう、それは哀れな話だね、これまでどこにいたの」

と源氏に尋ねられたが、ありのままには言いにくくて、

「寂しい郊外に住んでおいでになったのでございます。昔の女房も半分ほどはお付きしていましてございますから、以前の話もいたしまして悲しゅうございました」

と右近は言っていた。

「もうわかったよ。あの事情を知っていらっしゃらない方がいられるのだからね」
と源氏が隠すように言うと、
「私がおじゃまなの、私は眠くて何のお話だかわからないのに」
と女王（にょおう）は袖（そで）で耳をふさいだ。
「どんな容貌（きりょう）、昔の夕顔に劣っていない」
「あんなにはおなりにならないかと存じておりましたけれど、とてもおきれいにおなりになったようでございます」
「それはいいね、だれぐらい、この人とはどう」

「どういたしまして、そんなには」
と右近が言うと、
「得意なようで恥ずかしい。何にせよ私に似ていれば安心だよ」
わざと親らしく源氏は言うのであった。
その話を聞いた時から源氏はおりおり右近一人だけを呼び出して姫君の問題について語り合った。
「私はあの人を六条院へ迎えることにするよ。これまでも何かの場合によく私は、あの人の行くえを失ってしまったことを思って暗い心になっていたのだからね。聞き出せばすぐにその運びにしなければならないのを、

怠っていることでも済まない気がする。お父さんの大臣に認めてもらう必要などはないよ。おおぜいの子供に大騒ぎをしていられるのだからね。たいした母から生まれたのでもない人がその中へはいって行っては、結局また苦労をさせることになる。私のほうは子供の数が少ないのだから、思いがけぬ所で発見した娘だとも世間へは言っておいて、貴公子たちが恋の対象にするほどにも私はかしずいてみせる」

源氏の言葉を聞いていて、右近は姫君の運がこうして開かれて行きそうであるとうれしかった。

「何も皆思召し次第でございます。内大臣へお知らせ

いたしますのも、あなた様のお手でなくてはできないことでございます。不幸なお亡(な)くなり方をなさいました奥様のかわりにもともかくも助けておあげになりましたなら罪がお軽くなります」

と右近が言うと、

「私をまだそんなふうにも責めるのだね」

源氏は微笑(ほほえ)みながらも涙ぐんでいた。

「短いはかない縁だったと、私はいつもあの人のことを思っている。この家に集まって来ている奥さんたちもね、あの時にあの人を思ったほどの愛を感じた相手でもなかったのが、皆あの人のように短命でないこと

だけで、私の忘れっぽい男でないのを見届けているのが多いのに、あの人の形見にはただ右近だけを世話していることが残念な気のすることは始終だったのに、そうして姫君を私の手もとへ引き取ることができればうれしいだろう」

こう言って、源氏は姫君へ最初の手紙を書いた。あの末摘花（すえつむはな）に幻滅を感じたことの忘れられない源氏は、そんなふうに逆境に育った麗人の娘、大臣の実子も必ずしも期待にそむかないとは思われない不安さから手紙の返事の書きようでまずその人を判断しようとしたのである。まじめにこまごまと書いた奥には、

こんなに私があなたのことを心配していますことは、

知らずとも尋ねて知らん三島江に生ふる三稜のすぢは絶えじな

とも書いた。右近はこの手紙を自身で持って行って、源氏の意向を説明した。姫君用の衣服、女房たちの服の材料などがたくさん贈られた。源氏は夫人とも相談したものらしく、衣服係の所にできていた物も皆取り寄せて、色の調子、重ねの取り合わせの特にすぐれた物を選んで贈ったのであったから、九州の田舎に長く

いた人々の目に珍しくまばゆい物と映ったのはもっともなことである。姫君自身は、こんなりっぱな品々でなくても、実父の手から少しの贈り物でも得られたのならうれしいであろうが、知らない人と交渉を始めようなどとは意外であるというように、それとなく言って、贈り物を受けることを苦しく思うふうであったが、右近は母君と源氏との間に結ばれた深い因縁を姫君に言って聞かせた。人々も横から取りなした。

「そうして源氏の大臣の御厚意でごりっぱにさえおなりになりましたなら、内大臣様のほうからもごく自然に認めていただくことができます。親子の縁と申すも

のは絶えたようでも絶えないものでございます。右近でさえお目にかかりたいと一心に祈っていました結果はどうでございます。神仏のお導きがあったではございませんか。御双方ともお身体（からだ）さえお丈夫でいらっしゃればきっとお逢（あ）いになれる時がまいります」

とも慰めるのである。まず早く返事をと言って皆がかりで姫君を責めて書かせるのであった。自分はもうすっかり田舎者なのだからと姫君は書くのを恥ずかしく思うふうであった。用箋（ようせん）は薫物（たきもの）の香を沁（し）ませた唐紙（とうし）である。

数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく
根をとどめけん

とほのかに書いた。字ははかない、力のないようにも見えるものであったが、品がよくて感じの悪くないのを見て源氏は安心した。姫君を住ます所をどこにしようかと源氏は考えたが、南の一廓はあいた御殿もない。華奢（かしゃ）な生活のここが中心になっている所であるから、人出入りもあまりに多くて若い女性には気の毒である。中宮のお住居（すまい）になっている一廓の中には、そうした人にふさわしい静かな御殿もあいているが、中宮

の女房になったように世間へ聞かれてもよろしくないと源氏は思って、少しじみな所ではあるが東北の花散里（はなちるさと）の住居の中の西の対は図書室になっているのを、書物をほかへ移してそこへ住ませようという考えになった。近くにいる人も気だての優しい、おとなしい人であるから、花散里と親しくして暮らすのもいいであろうと思ったのである。こうなってから夫人にも昔の夕顔の話を源氏はしたのであった。そうした秘密があったことを知って夫人は恨んだ。

「困るね。生きている人のことでは私のほうから進んで聞いておいてもらわねばならないこともありますが

ね。たとえこんな時にでも昔のそうした思い出を話すのはあなたが特別な人だからですよ」

こう言っている源氏には故人を思う情に堪えられない様子が見えた。

「自分の経験ばかりではありませんがね、他人のことでもよく見ましたがね、女というものはそれほど愛し合っている仲でなくてもずいぶん嫉妬（しっと）をするもので、それに煩わされている人が多いから、自分は恐ろしくて、好色な生活はすまいと念がけながらも、そのうち自然に放縦（ほうしょう）にもなって、幾人（いくたり）もの恋人を持ちましたが、その中で可憐（かれん）で可憐でならなく思われた女としてその

人が思い出される。生きていたなら私は北の町にいる人と同じくらいには必ず愛しているでしょう。だれも同じ型の人はないものですが、その人は才女らしい、りっぱなというような点は欠けていたが、上品でかわいかった」

　などと源氏が言うと、

「でも、明石（あかし）の波にくらべるほどにはどうだか」

と夫人は言った。今も北の御殿の人を、不当にすばらしく愛されている女であると夫人はねたんでいた。小さい姫君がかわいいふうをして前に聞いているのを見ると、夫人の言うほうがもっともであるかもしれな

いと源氏は思った。それらのことは皆九月のうちのことであった。

姫君が六条院へ移って行くことは簡単にもいかなかった。まずきれいな若い女房と童女を捜し始めた。九州にいたころには相当な家の出でありながら、田舎へ落ちて来たような女を見つけ次第に雇って、姫君の女房に付けておいたのであるが、脱出のことがにわかに行なわれたためにそれらの人は皆捨てて来て、三人のほかにはだれもいなかった。京は広い所であるから、市女（いちめ）というような者に頼んでおくと、上手（じょうず）に捜してつれて来るのである。だれの姫君であるかというような

ことはだれにも知らせてないのである。いったん右近の五条の家に姫君を移して、そこで女房を選りととのえもし衣服の仕度も皆して、十月に六条院へはいった。

源氏は新しい姫君のことを花散里に語った。

「私の愛していた人が、むやみに悲観して郊外のどこかへ隠れてしまっていたのですが、子供もあったので、長い間私は捜させていたのですがなんら得る所がなくて、一人前の女になるまでほかに置いたわけなのですがその子のことが耳にはいった時にすぐにも迎えておかなければと思って、こちらへ来させることにしたのです。もう母親は死んでいるのです。中将をあなたの

子供にしてもらっているのですから、もう一人あったっていいでしょう。世話をしてやってください。簡単な生活をして来たのですから、田舎風なことが多いでしょう。何かにつけて教えてやってください」

「ほんとうにそんな方がおありになったのですか。私は少しも知りませんでした。お嬢さんがお一人で、少し寂しすぎましたから、いいことですわね」

花散里はおおように言っている。

「母親だった人はとても善良な女でしたよ。あなたも優しい人だから安心してお預けすることができるのです」

などと源氏が言った。

「母親らしく世話を焼かせていただくこともこれまではあまり少なくて退屈でしたから、いいことだと思います、ごいっしょに住むのは」

と花散里は言っていた。女房たちなどは源氏の姫君であることを知らずに、

「またどんな方をお迎えになるのでしょう。同じ所へね。あまりに奥様を古物扱いにあそばすではありませんか」

と言っていた。

姫君は三台ほどの車に分乗させた女房たちといっ

しょに六条院へ移って来た。女房の服装なども右近が付いていたから田舎びずに調えられた。源氏の所からそうした人たちに入り用な綾そのほかの絹布類は呈供してあったのである。

その晩すぐに源氏は姫君の所へ来た。九州へ行っていた人たちは昔光源氏という名は聞いたこともあったが、田舎住まいをしたうちにそのまれな美貌の人がこの世に現存していることも忘れていて今ほのかな灯の明りに几帳の綻びから少し見える源氏の顔を見ておそろしくさえなったのであった。源氏の通って来る所の戸口を右近があけると、

「この戸口をはいる特権を私は得ているのだね」
と笑いながらはいって、縁側の前の座敷へすわって、
「灯があまりに暗い。恋人の来る夜のようではないか。親の顔は見たいものだと聞いているがこの明りではどうだろう。あなたはそう思いませんか」
と言って、源氏は几帳を少し横のほうへ押しやった。姫君が恥ずかしがって身体（からだ）を細くしてすわっている様子に感じよさがあって、源氏はうれしかった。
「もう少し明るくしてはどう。あまり気どりすぎているように思われる」
と源氏が言うので、右近は燈心を少し掻（か）き上げて近

く へ寄せた。
「きまりを悪がりすぎますね」
と源氏は少し笑った。ほんとうにと思っているような姫君の目つきであった。少しも他人のようには扱わないで、源氏は親らしく言う。
「長い間あなたの居所がわからないので心配ばかりさせられましたよ。こうして逢うことができても、まだ夢のような気がしてね。それに昔のことが思い出されて堪えられないものが私の心にあるのです。だから話もよくできません」
こう言って目をぬぐう源氏であった。それは偽りで

なくて、源氏は夕顔との死別の場を悲しく思い出して
いるのであった。年を数えてみて、
「親子であってこんなに長く逢えなかったというよう
なことは例もないでしょう。恨めしい運命でしたね。
もうあなたは少女のように恥ずかしがってばかりいて
よい年でもないのですから、今日までの話も私はした
いのに、なぜあなたは黙ってばかりいますか」
と源氏が恨みを言うのを聞くと、何と言ってよいか
わからぬほど姫君は恥ずかしいのであったが、
「足立たずで（かぞいろはいかに哀れと思ふらん三と
せになりぬ足立たずして）遠い国へ流れ着きましたこ

ろから、私は生きておりましたことか、死んでおりましたことかわからないのでございます」
とほのかに言うのが夕顔の声そのままの語音（ごいん）であった。源氏は微笑を見せながら、
「あなたに人生の苦しい道をばかり通らせて来た酬（むく）いは私がしないでだれにしてもらえますか」
と言って、源氏は聡明（そうめい）らしい姫君の物の言いぶりに満足しながら、右近にいろいろな注意を与えて源氏は帰った。

感じのよい女性であったことをうれしく思って、源氏は夫人にもそのことを言った。

「野蛮な地方に長くいたのだから、気の毒なものに仕上げられているだろうと私は軽蔑（けいべつ）していたが、こちらがかえって恥ずかしくなるほどでしたよ。娘にこうした麗人を持っているということを世間へ知らせるようにして、よくおいでになる兵部卿（ひょうぶきょう）の宮などに懊悩（おうのう）をおさせするのだね。恋愛至上主義者も私の家（うち）ではきまじめな方面しか見せないのも妙齢の娘などがないからなのだ。たいそうにかしずいてみせよう、まだ成っていない貴公子たちの懸想（けそう）ぶりをたんと拝見しよう」

と源氏が言うと、

「変な親心ね。求婚者の競争をあおるなどとはひどい

方」

と女王（にょおう）は言う。

「そうだった、あなたを今のような私の心だったらそう取り扱うのだった。無分別に妻などにはしないで、娘にしておくのだった」

夫人の顔を赤らめたのがいかにも若々しく見えた。

源氏は硯（すずり）を手もとへ引き寄せながら、無駄（むだ）書きのように書いていた。

恋ひわたる身はそれながら玉鬘（たまかづら）いかなる筋を尋ね来つらん

「かわいそうに」
とも独言（ひとりごと）しているのを見て、玉鬘の母であった人は、前に源氏の言ったとおりに、深く愛していた人らしいと女王は思った。

　源氏は子息の中将にも、こうこうした娘を呼び寄せたから、気をつけて交際するがよいと言ったので、中将はすぐに玉鬘の御殿へ訪（たず）ねて行った。

「つまらない人間ですが、こんな弟がおりますことを御念頭にお置きくださいまして、御用があればまず私をお呼びになってください。こちらへお移りになりま

した時も、存じないものでお世話をいたしませんでした」

と忠実なふうに言うのを聞いていて、真実のことを知っている者はきまり悪い気がするほどであった。物質的にも一所懸命の奉仕をしていた九州時代の姫君の住居も現在の六条院の華麗な設備に思い比べてみると、それは田舎らしいたまらないものであったように、おと、ど、などは思われた。すべてが洗練された趣味で飾られた気高（けだか）い家にいて、親兄弟である親しい人たちは風采（ふうさい）を始めとして、目もくらむほどりっぱな人たちなので、こうなってはじめて三条も大弐を軽蔑（けいべつ）してよい気に

なった。まして大夫(たゆう)の監(げん)は思い出すだけでさえ身ぶるいがされた。何事も豊後介(ぶんごのすけ)の至誠の賜物(たまもの)であることを玉鬘も認めていたし、右近もそう言って豊後介を賞(ほ)めた。確(しか)とした規律のある生活をするのにはそれが必要であると言って、玉鬘付きの家従や執事が決められた時に豊後介もその一人に登用された。すっかり田舎上がりの失職者になっていた豊後介はにわかに朗らかな身の上になった。かりにも出入りする便宜などを持たなかった六条院に朝夕出仕して、多数の侍を従えて執務することのできるようになったことを豊後介は思いがけぬ大幸福を得たと思っていた。これらもすべて源

氏が思いやり深さから起こったことと言わねばならない。

年末になって、新年の室内装飾、春の衣裳（いしょう）を配る時にも、源氏は玉鬘を尊貴な夫人らと同じに取り扱った。どんなに思いのほかによい趣味を知った人と見えても、またどんなまちがった物の取り合わせをするかもしれぬという不安な気持ちもあって、玉鬘のほうへはすでに衣裳にでき上がった物を贈ることにしたが、その時にほうぼうの織物師が力いっぱいに念を入れて作り出した厚織物の細長や小袿（こうちぎ）の仕立てたのを源氏は手もとへ取り寄せて見た。

「非常にたくさんありますね。奥さんたちなどにもそれぞれよい物を選(え)って贈ることにしよう」

と源氏が夫人に言ったので、女王は裁縫係の所にでき上がっている物も、手もとで作らせた物もまた皆出して源氏に見せた。紫の女王はこうした服飾類を製作させることに趣味と能力を持っている点でも源氏はこの夫人を尊重しているのである。あちらこちらの打ち物の上げ場から仕上がって来ている糊(のり)をした打ち絹も源氏は見比べて、濃い紅(べに)、朱の色などとさまざまに分けて、それを衣櫃(ころもびつ)、衣服箱などに添えて入れさせていた。高級な女房たちがそばにいて、これをそれに、

それをこれにというように源氏の命じるままに贈り物を作っているのであった。夫人もいっしょに見ていて、

「皆よくできているのですから、お召しになるかたのお顔によく似合いそうなのを見立てておあげなさいまし。着物と人の顔が離れ離れなのはよくありませんから」

と言うと、源氏は笑って、

「素知らぬ顔であなたは着る人の顔を想像しようとするのですね。それにしてもあなたはどれを着ますか」

と言った。

「鏡に見える自分の顔にはどの着物を着ようという自

信も出ません」

　さすがに恥ずかしそうに言う女王であった。紅梅色の浮き模様のある紅紫の小袿(こうちぎ)、薄い臙脂紫(えんじむらさき)の服は夫人の着料として源氏に選ばれた。桜の色の細長に、明るい赤い掻練(かいねり)を添えて、ここの姫君の春着が選ばれた。薄いお納戸色に海草貝類が模様になった、織り方にたいした技巧の跡は見えながらも、見た目の感じの派手(はで)でない物に濃い紅の掻練を添えたのが花散里(はなちるさと)。真赤(まっか)な衣服に山吹(やまぶき)の花の色の細長は同じ所の西の対の姫君の着料に決められた。見ぬようにしながら、夫人にはひそかにうなずかれるところがあるのである。内大臣が

はなやかできれいな人と見えながらも艶(えん)な所の混じっていない顔に玉鬘(たまかずら)の似ていることを、この黄色の上着の選ばれたことで想像したのであった。色に出して見せないのであるが、源氏はそのほうを見た時に、夫人の心の平静でないのを知った。

「もう着る人たちの容貌(きりょう)を考えて着物を選ぶことはやめることにしよう、もらった人に腹をたてさせるばかりだ。どんなによくできた着物でも物質には限りがあって、人の顔は醜くても深さのあるものだからね」

こんなことも言いながら、源氏は末摘花(すえつむはな)の着料に柳の色の織物に、上品な唐草(からくさ)の織られてあるのを選んで、

それが艶な感じのする物であったから、人知れず微笑(ほほえ)まれるのであった。梅の折り枝の上に蝶(ちょう)と鳥の飛びちがっている支那(しな)風な気のする白い袿(うちぎ)に、濃い紅の明るい服を添えて明石(あかし)夫人のが選ばれたのを見て、紫夫人は侮辱されたのに似たような気が少しした。空蝉(うつせみ)の尼君には青鈍(あおにび)色の織物のおもしろい上着を見つけ出したのへ、源氏の服に仕立てられてあった薄黄の服を添えて贈るのであった。同じ日に着るようにとどちらへも源氏は言い添えてやった。自身の選定した物がしっくりと似合っているかを源氏は見に行こうと思うのである。

夫人たちからはそれぞれの個性の見える返事が書いてよこされ、使いへ出した纏頭（てんとう）もさまざまであったが、末摘花は東の院にいて、六条院の中のことでないから纏頭などは気のきいた考えを出さねばならぬのに、この人は形式的にするだけのことはせずにいられぬ性格であったから纏頭も出したが、山吹色の袿（うちぎ）の袖口（そでぐち）のあたりがもう黒ずんだ色に変色したのを、重ねもなく一枚きりなのである。末摘花女王（すえつむはなにょおう）の手紙は香の薫（かお）りのする檀紙（だんし）の、少し年数物になって厚く膨（ふく）れたのへ、

どういたしましょう、いただき物はかえって私の心を暗くいたします。

着て見ればうらみられけりから衣(ごろも)かへしやりてん袖(そで)を濡(ぬ)らして

と書かれてあった。字は非常に昔風である。源氏はそれをながめながらおかしくてならぬような笑い顔をしているのを、何があったのかというふうに夫人は見ていた。源氏は使いへ末摘花の出した纏頭(てんとう)のまずいのを見て、機嫌(きげん)の悪くなったのを知り、使いはそっと立って行った。そしてその侍は自身たちの仲間とこれを笑い話にした。よけいな出すぎたことをする点で困らせ

られる人であると源氏は思っていた。
「りっぱな歌人なのだね、この女王は。昔風の歌詠(よ)みはから衣、袂(たもと)濡るるという恨みの表現法から離れられないものだ。私などもその仲間だよ。凝り固まっていて、新しい言葉にも表現法にも影響されないところがえらいものだ。御前などの歌会の時に古い人らが友情を言う言葉に必ずまどいという三字が使われるのもいやなことだ。昔の恋愛をする者の詠む歌には相手を悪く見て仇人(あだびと)という言葉を三句めに置くことにして、それをさえ中心にすれば前後は何とでもつくと思ったものらしい」

などと源氏は夫人に語った。
「いろんな歌の手引き草とか、歌に使う名所の名とかの集めてあるのを始終見ていて、その中にある言葉を抜き出して使う習慣のついている人は、それよりほかの作り方ができないものと見える。常陸(ひたち)の親王のお書きになった紙屋紙(かんやがみ)の草紙というのを、読めと言って女王(にょおう)さんが貸してくれたがね、歌の髄脳(ずいのう)、歌の病(やまい)、そんなことがあまりたくさん書いてあったから、もともとそのほうの才分の少ない私などは、それを見たからといって、歌のよくなる見込みはないから、むずかしくてお返ししましたよ。それに通じている人の歌とし

てはだれでもが作るような古いところがあるじゃないかね」

滑稽(こっけい)でならないように源氏に笑われている末摘花の女王はかわいそうである。夫人はまじめに、

「なぜすぐお返しになりましたの、写させておいて姫君にも見せておあげになるほうがよかったでしょうにね。私の書物の中にも古いその本はありましたけれど、虫が穴をあけて何も読めませんでした。その御本に通じていて歌の下手(へた)な方よりも、全然知らない私などはもっとひどく拙(つたな)いわけですよ」

と言った。

「姫君の教育にそんなものは必要でない。いったい女というものは一つのことに熱中して専門家的になっていることが感じのいいものではない。といって、どの芸にも門外の人であることはよくないでしょうがね。ただ思想的に確かな人にだけしておいて、ほかは平穏で瑕（きず）のない程度の女に私は教育したい」

こんなことを源氏は言っていて、もう一度末摘花へ返事を書こうとするふうのないのを、夫人は、

「返しやりてん、とお言いになったのですから、もう一度何とかおっしゃらないでは失礼ですわ」

と言って、書くことを勧めていた。人情味のある源

氏であったから、すぐに返歌が書かれた、非常に楽々と、

かへさんと言ふにつけても片しきの夜の衣を思ひこそやれ

ごもっともです。

という手紙であったらしい。

底本：「全訳源氏物語　中巻」角川文庫、角川書店
１９７１（昭和46）年11月30日改版初版発行
１９９４（平成６）年６月15日39版発行
※このファイルは、古典総合研究所（http://www.genji.co.jp/）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。
※校正には、２００２（平成14）年１月15日44版を使用しました。
入力：上田英代
校正：kompass
２００３年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。